

「学年別漢字配当表」と系統的指導法について

谷 口 政 巳

はじめに

一昨年(2008年)3月、新しい小学校学習指導要領が告示された。国語科の目標に関しては従来と同じであるが、内容については、この間の教育基本法や学校教育法の改正を踏まえた中央教育審議会答申が反映されたものとなっている。

具体的には、伝統や文化に関する教育が重視されるとともに、①基礎的・基本的な知識・技能の習得と、それらを活用し、②課題解決に必要な思考力・判断力・表現力を育成し、③「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の調和した「生きる力」をはぐくむことが重視されている。特に、すべての基盤となる基礎的・基本的な知識・技能については、系統性に留意しながら、①子どもたちが社会の変化や科学技術の進展に対応していくために必要な知識・技能、②学校や学年間で反復学習することで効果的に習得できる知識・技能が重視されている。

本稿で考察しようとする「学年別漢字配当表」の指導に関しても、従来と全く同じ1006字ではあるが、当然、指導方法には指導要領改訂の趣旨を反映させるべきものであり、以下、学年別漢字配当表と系統的指導法というテーマで私見を述べたい。

1 常用漢字表と学年別漢字配当表

漢字はその数が際限なく字体も不統一であったため、明治維新や戦後の大改革期には、国語として日本語を用いることの是非も含め、漢字を国語の表記に用いることの是非が議論されてきた。初めて国字政策として漢字制限が試みられたのは、1922年(大正11年)に臨時国語調査会(国語審議会の前身)が選定した「常用漢字」1962字である。しかし、これは一般化することではなく、終戦直後の1946年(昭和21年)、漢字の全廃を前提に、それまで当面使用できる漢字として「常用漢字」を下敷に「当用漢字表」1850字が内閣から告示された。この「当用漢字表」は、公文書や学校教育、マスメディアなどで広く用いられることとなり、音訓表の改定や同音漢字による書きかえの容認などの手直しが行われる中で、皮肉にも広く国民の中に定着していった。その実態を反映し、国語審議会において、日本語の表記は「漢字仮名交じり文が前提」との方針転換がなされ、1981年(昭和56年)、改めて「常用漢字表」1945字が内閣から告示されたのである。なお、2010年(平成22年)5月、文化庁の文化審議会国語分科会が現行の常用漢字表から「勺」「鍾」「銑」「脹」「𠂔」の5字を削って新たに196字を追加し、総数2136字とする答申案を決定している。今後、6月の文化審議会を経て正式に答申され、年内にも告示される予定のようである。

一方、学校教育では、「当用漢字表」が公布された2年後の1948年、特に小学校段階で習得

すべき漢字として「当用漢字別表」881字が公布された。1958年（昭和33年）には「筆順指導のてびき」が公布されると同時に、小学校学習指導要領の別表に「学年別漢字配当表」として示され、1961年より全ての小学校で混乱なく漢字指導が行われるようになった。その後、1968年にはさらに115字が備考欄に加えられ、1977年の学習指導要領改訂で正式に「学年別漢字配当表」996字となり、配当学年も大幅に組みかえられた。さらに1989年の学習指導要領改訂で新しく20字を加えて10字を削り、「学年別漢字配当表」1006字として現在に至っている。

「学年別漢字配当表」について、その字数や配当の適否は別の機会に稿を改めることとし、まず、現行の「学年別漢字配当表」を漢字指導の基礎資料として掲載しておく。

＜現行の「学年別漢字配当表」＞

1年（80字）
一右兩円王音下火花貝学気九休玉金空月犬見五口校左三山子四糸字耳七車手十出女小上森 人水正生青夕石赤千川先早草足村大男竹中虫町天田土二日入年白八百文木本名目立力林六
2年（160字）
引羽雲園遠何科夏家歌画回会海絵外角楽活間丸岩顔汽記帰弓牛魚京強教近兄形計元言原戸 古午後語工公広交光考行高黄合谷国黒今才細作算止市矢姉思紙寺自時室社弱首秋週春書少 場色食心新親図数西声星晴切雪船線前組走多太体台地池知茶屋長鳥朝直通弟店点電刀冬当 東答頭同道読内南肉馬売買麦半番父風分聞米歩母方北毎妹万明鳴毛門夜野友用曜来里理話
3年（200字）
悪安暗医委意育員院飲運泳駅央横屋温化荷界開階寒感漢館岸起期客究急級宮球去橋業曲局 銀区苦具君係軽血決研県庫湖向幸港号根祭皿仕死使始指齒詩次事持式実写者主守取酒受州 拾終習集住重宿所暑助昭消商章勝乗植申身神真深進世整昔全相送想息遠族他打對待代第題 炭短談着注柱丁帳調追定庭笛鉄転都度投豆島湯登等動童農波配倍箱畑炭反坂板皮悲美鼻筆 氷表秒病品負部服福物平返勉放味命面問役業由油有遊予羊洋葉陽様落流旅両緑礼列練路和
4年（200字）
愛案以衣位罍胃印英栄塩億加果貨課芽改械害街各覚完官管関観願希季紀喜旗器機議求泣救 給拳漁共協競競極訓軍郡徑型景芸欠結建健験固功好候航康告差菜最材昨札刷殺察参産散殘 士氏史司試児治辞失借種周祝順初松笑唱焼象照賞臣信成省清静席積折節説淺戦選然争倉巢 束側続卒孫帯隊達単置仲貯兆腸低底停の典伝徒努灯堂働特得毒熱念敗梅博飯飛費必票標不 夫付府副粉兵別辺変便包法望牧末満未脈民無約勇要養浴利陸良料量輪類令冷例歴連老勞録
5年（185字）
圧移因永営衛易益液演応往桜恩可仮価河過賀快解格確額刊幹憤眼基寄規技義逆久旧居許境 均禁句群経潔件券險検限現減故個護効厚耕鉞構興講混査再災妻採際在財罪維酸賛支志枝師 資飼示似識質舍謝授修述術準序招承証条状常情織職制性政勢精製税責績接設舌絶銭祖素総 造像増則測厲率損退貸態団断築張提程適敵統銅導徳独任燃能破犯判版比肥非備儀評貧布婦 富武復復仏編弁保墓報防買暴務夢迷綿輸余預容略留領

6 年 （181 字）
異遺域宇映延沿我灰抗革閣割株干卷看簡危机揮貴疑吸供胸鄉動筋系敬警劇激穴絹權憲源嚴 己呼誤后孝皇紅降鋼刻穀骨困砂座濟裁策冊蚕至私姿視詞誌磁射捨尺若樹収宗就衆從縦縮熟 純処署諸除将傷障城蒸針仁垂推寸盛聖誠宣專泉洗染善奏窓創装層操蔵臙存尊宅担探誕段暖 値宙忠著庁頂潮質痛展討党糖届難乳認納腦派拝背肺俳班晩否批秘腹奮並陞閉片補暮宝訪亡 忘棒枚幕密盟模訳郵優幼欲翌乱卵覧裏律臨朗論

新学習指導要領では、漢字の指導内容に関わって、従来は一般的な「言語事項」の項目で扱われていたが、教育目標に応じてより具体的な「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」という項目に改められている。そして、我が国の伝統的な言語文化を享受し、継承・発展させる態度を育てることや、国語の特質についてまとめた知識を身に付けること、実際の言語活動で活かす能力を育てることに重点が置かれている。すなわち、漢字の読み書きなど基本的な力を定着させ、各教科等において様々な言語活動で活用し、さらにその上で系統的な漢字の知識を指導することによって一層理解を深め、再び実際の言語活動で活かすというように、体験学習と系統学習の間で反復（スパイラル）させることによって、知識力と応用力とを調和させながら確実な習得を目指そうとしていることが伺える。

ところで、「学年別漢字配当表」は従来と異同がなく、その指導も、各学年に配当された漢字を、その学年で読めるようになり、漸次書き、文や文章の中で使えるようになること。また児童の学習負担に配慮しつつ、必要に応じて当該学年以前の漢字や以降の漢字も指導できることなどが共通して示されているが、今回は特に、「学年別漢字配当表」外の常用漢字についても、振り仮名を付けるなどの配慮をしながら、必要に応じて指導できることになっている。

また、子どもたちの発達段階を考慮し、各学年独自の漢字指導の内容として、

① 低学年

（書写の項で）点画の長短や方向、接し方や交わり方などに注意して、筆順に従って文字を正しく書くこと

② 中学年

（文字の項で）漢字のへん、つくりなどの構成についての知識をもつこと

（書写の項で）文字の組み立て、点画の種類を理解し、形を整えて書くこと

③ 高学年

（文字の項で）仮名及び漢字の由来、特質などについて理解すること

などが示されており、これらを踏まえながら漢字の系統的な指導を考えていきたい。

2 漢字の体系と指導の系統化をめざして

漢字には、基本的にどの字にも必ず一定の「形」「音」「義」の三つの要素が具わっている。「形」とは、その漢字を構成している点画のことであり、「音」とは、その漢字の読み方である。また、「義」とは、その漢字の表している意味である。漢字にはこの三要素が一体となって具わっているため、漢字文化圏に属する我々は、「山」という漢字を見て「サン」と読み、「やま」

を表していることが即座に了解できるという恩恵を受けている。この漢字の起源は、中国の殷代、紀元前 1500 年ごろに遡るとされているが、殷代の契文（甲骨文字）から周代の金文（鐘鼎文字）、籀文（大篆）、秦代の篆文（小篆）、漢代の隸書などと字形の変遷を経、「形」「音」「義」すべてにわたって変化し、生成、消滅を繰り返しながら現代の楷書に至っている。

(1) 漢字の基礎基本と低学年での指導

ところで、わが国における漢和辞典の最高峰である諸橋轍次氏の「大漢和辞典」には 48902 字にも及ぶ漢字が収録されているが、その辞典編成の原型として用いられたのが、中国の漢代、西暦 100 年に著された許慎の「説文解字」である。「説文解字」には、漢字一字ごとに「形」「音」「義」が解説され、収録した漢字 9353 字全てが 540 の部首で組織立てられている。特に、その巻末に「六書」という漢字の字源・構造についての区分を設け、「象形」「指事」「会意」「形声」「転注」「仮借」の六つの成り立ちを説明している。この「六書」のうち造字法に関わる「象形」「指事」「会意」「形声」の四つは、漢字指導法としても極めて有効であるため、簡単に整理しておきたい。

- ① 象形 最も原初的な絵文字、略画文字で、その中には、人・大・女・月など一つの物を描いた象形、比・立・母・典など二つの物を描いた象形、了・夕・戸・片など既成の象形の一部を描いた象形がある。
- ② 指事 上・下・本・末など既成の象形文字に点画を付け、抽象的な事柄を表そうとした文字。
- ③ 会意 信・鳴・宮・初・因など既成の象形文字や指事文字の意味同士を組み合わせで新しい概念を示そうとした文字。
- ④ 形声 二つ以上の既成文字を意符と音符に使い分けて組み合わせ、新しい概念を示そうとした文字で、紅のように工を音符としてのみ用いた単純な形成や、功や空のように工を音符としてだけでなく意符としても用い、会意を兼ねた形声もある。

以上の方法であらゆる漢字が作られているという、これは見事な漢字の体系であり、これを子どもたちの学習指導に生かすのは当然のことであろう。ただ、人間の生み出したことばの体系は、文法であれ、文字であれ、発音であれ、例外はつきもので、法則で全てを単純に整理し切ることなどできず、中には法則にあてはめるためにより複雑な説明を要する漢字もある。したがって、子どもたちに理解しやすい範囲で、すなわち「体系」の本質的な部分を大切にしながらも、子どもたちの発達と教育的有効性を考慮した「系統」に組み替え、指導に生かすことが肝要であると考える。

「説文解字」以後、個々の漢字の造字法上の分類は様々な検討が加えられており、学者によって象形と指事、会意と形声の間で少なからぬ異同が見られる。そこで本稿では、個々の漢字について造字法上の分類理由を詳しく示している「角川 当用漢字 字源辞典」（加藤常賢・山田勝美著）を基本的に用いることとした。この字源辞典によって「学年別漢字配当表」の 1006 字を学年毎に分類してみると次のようになる。

学年	象形文字	指事文字	会意文字	形声文字	総字数
1 年	43 字(53.8%)	6 字(7.5%)	9 字(11.3%)	22 字(27.5%)	80 字
2 年	43 字(26.9%)	0 字(0.0%)	12 字(7.5%)	105 字(65.6%)	160 字
3 年	21 字(10.5%)	1 字(0.5%)	17 字(8.5%)	161 字(80.5%)	200 字
4 年	19 字(9.5%)	1 字(0.5%)	19 字(9.5%)	161 字(80.5%)	200 字
5 年	8 字(4.3%)	0 字(0.0%)	8 字(4.3%)	169 字(91.4%)	185 字
6 年	13 字(6.5%)	0 字(0.0%)	16 字(8.0%)	152 字(84.0%)	181 字
計	147 字(14.6%)	8 字(0.8%)	81 字(8.0%)	770 字(76.4%)	1006 字

表を見て分かるように、低学年ほど象形文字が多く、中学年・高学年になるにしたがって形声文字が大部分を占めるようになっていく。象形文字は具体的に目に見える事物の形をそのままに略画文字にしたものであるため、漢字に親しみ始める子供たちに絵として与え、それを変形させて文字の成立を説明したり、それによって漢字の「形」「音」「義」を丸ごと覚えさせるのに都合がよい。

子どもたちは、初めて習う漢字に興味を示し、一度覚えたら積極的に使おうとするだろう。ただ、この時期の子どもたちは、意味を考えず、音だけを頼りにした当て字をよく使い、点画もいい加減に書いてしまう。しかし、子どもの発達段階からみて、低学年において漢字の成り立ちを指導するのは誤りである。新出漢字の少ないこの段階では、象形文字や指事文字を中心に文字通り「基礎基本」としての漢字を楽しく、しかも正確に教えることが大切である。「形（点画）」「音（読み）」「義（意味）」の三つと、「筆順」「画数」の二つを結合させ、漢字をことばとして丸ごと捉えさせ、確実な定着をはかりたい。

授業の最初、既習の漢字を一斉に「いち」「にい」と筆順や画数に注意させながら「空書き」したり、限られた国語の授業だけでなく、あらゆる機会を通じて、子どもたちが大好きなクイズやゲーム、競争など遊びの要素を取り入れ、楽しい学習となるよう心がける必要がある。

(2) 漢字の組み立てと中学年での指導

さて、前掲の「大漢和辞典」も、部首立てについては「説文解字」の 540 部首に依らず、わが国のあらゆる漢和辞典と同様、中国の清代、康熙帝の命による国家的な事業として編纂され、1716 年に完成した「康熙字典」に従っている。この「康熙字典」には実に 47035 字が収録され、それらが 214 の部首によって組織立てられているのである。この部首の中には、我が国の常用漢字にはもちろん、古来中国においても単独の文字として用いられたことのない文字（記号というべきか）も含まれてはいるが、少なくとも半数を超える 108 部首がそのまま「学年別漢字配当表」の漢字となっている。当然、そのほとんどは象形文字であり、部首としてあらゆる漢字の構成部分に用いられているのである。

部首に用いられている漢字を「学年別漢字配当表」から示すと、次のとおりである。

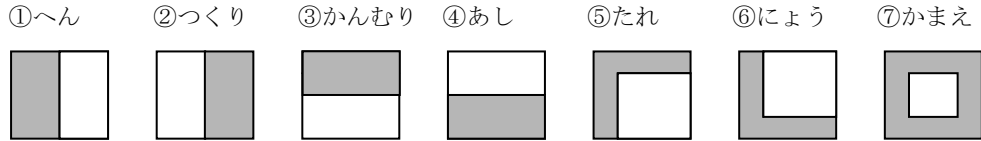
学年	部首に用いられている漢字	
1 年	44 字	象形：一二人(𠂇)入力十口土夕大女子小山川手(扌)文日月木水(氵)火(灬) 犬(犳)玉(王)田白目(目)立竹糸耳虫貝足車雨 (以上 36 字) 指事：八生 (以上 2 字) 会意：赤音 (以上 2 字) 形声：石見金青 (以上 4 字)
2 年	36 字	象形：刀(刂)工弓心(忄)戸方止毛牛用矢米羽肉(月)自行西角長門首馬高魚 鳥黃黑 (以上 27 字) 指事：なし 会意：里 (以上 1 字) 形声：父色言谷走風食麦 (以上 8 字)
3 年	9 字	象形：皿羊血豆身 (以上 5 字) 指事：なし 会意：面 (以上 1 字) 形声：皮鼻齒 (以上 3 字)
4 年	7 字	象形：士欠氏老臣衣飛 (以上 7 字)
5 年	5 字	象形：支比示非 (以上 4 字) 指事：なし 会意：舌 (以上 1 字) 形声：なし
6 年	7 字	象形：己干至革 (以上 4 字) 指事：寸 (以上 1 字) 会意：なし 形声：穴骨 (以上 2 字)
計	108 字	象形 83 字、指事 3 字、会意 5 字、形声 17 字

表を見て分かるように、部首となる漢字の圧倒的多数が低学年に配当されており、しかも象形文字が 63 字と全学年の 6 割を占めている。つまり、低学年のうちに象形文字をきっちり定着させておくと、中学年以降にそれを部首として会意・形声という圧倒的多数の漢字の構成的な理解に生かすことができるわけである。

既に低学年で 86 字の象形文字を中心に、指示・会意・形成の各文字を含め 240 字を学習しており、それを土台にしながら中学年では漢字の組み立てについても学習させることが可能となる。ここでは、漢字の組み立てや部首を理解し、部首が漢字の意味と深い関わりがあることを知り、漢字に対する一層知的な興味・関心を引き起こす指導が重要であろう。新学習指導要領でも、中学年の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の中で、「漢字のへん、つくりなどの構成についての知識をもつこと」と示されている。

最初は、既習の文字を組み合わせたり、二つ（あるいは三つ）の漢字に分けさせることから指導したい。これも漢字の足し算、引き算といったクイズ遊びから導入し、問題づくりを子どもにさせると、無理なく楽しく、どんどん発展していく。

次に、「へん」「つくり」「かんむり」など構成部位とあわせて部首名の学習と部首と意味との関わりについての指導に移りたい。



①「へん」の指導では、例えば、「木（きへん）」の漢字（林校村横橋根植柱板様械機極材杢松梅標など、知っている漢字）を集める。それらに共通した意味を考える。部首と意味との関わりを知る。こうした順序で「イ（にんべん）人の変形」「ヰ（さんずいへん）水の変形」「才（てへん）手の変形」「忄（りっしんべん）心の変形」「糸（いとへん）」「言（ごんべん）」など、分かりやすく、字例の多い部首から子どもに活動させながら順次指導していくのがよい。「ネ（ころもへん）」と「ネ（しめすへん）」の字形や意味の違い、「月（つきへん）」と「月（にくづき）」の字源や意味の違いも、ここでしっかり指導する必要がある。

なお、「イ（ぎょうにんべん）」「𠂔（こざとへん）阜の変形」のように、元来「形」「音」「義」を持ち合わせた漢字であり、部首として字例の多いものは指導する必要がある。

②「つくり」の指導では、「力（りきづくり）」「欠（あくび）」「頁（おおがい）首の変形」「𠂔（りっとう）刀の変形」などが指導しやすい。「斤（おのづくり）」は、4年までに「新」「所」「折」が出るだけで、「斤」自体は常用漢字表まで出てこない。また、「𠂔（おおざと）邑の変形」については、「𠂔（こざとへん）」との形、意味の違いを明確にするためにも指導する必要がある。

なお、「欠（ぼくづくり）」「𠂔（ほこづくり）」「又（また）右手の変形」も、元来「形」「音」「義」を持ち合わせた漢字であり、部首としてとしての字例も多く、「手」との関連で一緒に指導しておくとなし。

③「かんむり」の指導では、「竹（たけかんむり）」「雨（あめかんむり）」「穴（あなかんむり）」などが指導しやすい。ただ、「穴（あなかんむり）」については、「穴」の漢字が6年に配当されているが、新学習指導要領の「指導計画と内容の取り扱い」において、「児童の学習負担に配慮しつつ、必要に応じて、当該学年以前の学年又は当該学年以降の学年において指導することもできる」とされており、この段階で指導するのがよいと考える。

なお、わが国では一般に単独の漢字として用いられない「艸（くさかんむり）艸の変形」「宀（うかんむり）」については、子どもにとって身近な漢字の字例も多く、意味も分かりやすいので、ここで指導しておきたい。一方、「冫（わかかんむり）」については学年別漢字配当表にも字例がなく、ここで機械的に指導する必要はない。また、「老（おいかんむり）」「𠂔（はつがしら）」などは、「者」「老」「登」「発」と字例は少ないものの、4年までに学習する漢字でもあり、子

どもの興味・関心に応じて指導すればよいと考える。

④「あし」の指導では、「心（したごころ）」「灬（れんが）火の変形」「儿（ひとあし）人の変形」などが指導しやすい。

⑤「たれ」の指導でも、「尸（がんだれ）」「尸（まだれ）」「尸（やまいだれ）」「尸（しかばね）」などの指導で十分である。

⑥「にょう」の指導でも、「走（そうにょう）」「爻（えんにょう）」「辶（しんにょう）辵の変形」などの指導で十分である。

⑦「かまえ」の指導では、周りを全て囲んだ「口（くにがまえ）」、下が開いた「門（もんがまえ）」、左右に分かれた「行（ぎょうがまえ）」、左と下が開いた「冫（つつみがまえ）」、右が開いた「匚（かくしがまえ）」など、漢字の指導とともに、部首の名前と部位に注意させる指導が必要である。

(3) 漢字の成り立ちと高学年での指導

新学習指導要領では、高学年の指導事項として「仮名及び漢字の由来、特質について理解すること」と規定されている。1000字前後の漢字を学習し、自分の文章の中でも用いることができるようになったこの段階、部首を学習し、漢字の組み立てについての理解も進んだこの段階でこそ、(1)で述べた漢字の成り立ちを指導することができる。「学年別漢字配当表」の1006字に限っても76.4%を占め、全漢字の9割以上を占めるといわれる形声文字を中心に漢字の世界を大きく広げていく「基礎基本」としての漢字の成り立ちを、ここでしっかり指導したい。

漢字を「六書」に基づく象形、指事、会意、形声に分類して指導する方法は、学校現場で広く実践されているところであり、ここで改めて述べることは控えたい。確かに、漢字の成り立ちを「六書」で指導することは有効ではあるが、あまり深入りし過ぎると、その難解さと曖昧さによって弊害も生じてくる。もともと、人間が必要に迫られ、ことばや文字を生みだし、使っていく中で発展してきたような言語文化は、法則的な部分と例外的な部分を併せ持っている。文法体系にしても、学者によって切り口が違えば異なった体系となり、それぞれ整理しきれない例外的な部分も生じるものである。漢字の体系も同様で、象形、指事、会意、形声の分類は学者によって異なるのが常である。要は、子どもたちに分かりやすい法則的な部分を理解させ、その知識をもとに漢和辞典が活用できるようになったり、漢字の世界を自分から広げていけるような力を身につけさせることこそが肝要であると考ええる。

ところで、(2)でも述べたように、象形文字を中心とする部首は、その意味のまとまりで漢字を組織立てている。つまり、形声文字の意符が部首であり、その部首を除いた部分が音符である。このことは分かりやすい有効な原則でありながら学校現場では全く教えられていないことなので、ここで特に触れておきたい。

例えば、「功」という漢字は、「工」と「力」からなっており、発音を表す部分、すなわち音符が「工（コウ）」である。すると、残りの「力」が意味を表す意符であり、取りも直さず部首は「りきづくり」である。従って、漢和辞典を引くときには、「力」の部で引けばいいということが容易に指導できる。「工」の部に「功」の字は分類されていないのである。また、「賞」という漢字は、「尚」と「貝」からなっている。音符が「尚（ショウ）」であるから、残りの「貝」

が意符となる。つまり、「賞」は「貝」の部に分類されているのである。

例え多少複雑に組み合わせられていても、「裏」という漢字は、音符が「里（リ）」であるから、離れてはいるが残りの「衣」が意符で、「衣」の部に分類されていることが分かる。同様の造字法で「衷」や「褒」が造られているため、すぐに常用漢字表やその範囲外の文字にまで発展していくだろう。

また、紛らわしい例としてよく問題にされるが、「聞」は「門」が音符であるから、意符すなわち部首は「口」の部となるのが当然で、決して「もんがまえ」とはならない。逆に「閑」は「各」が音符であるから意符は「門」となり、「門」の部に分類されていることも理解でき、極めて明解に交通整理ができるのである。さらに、少し複雑になるため、小学生にここまで指導する必要はないと思われるが、発展すればこのようにも利用できる。「聞」は聞くことだから「門」ではなく「耳」と関係している。だから「耳」が意符で部首。残りの「門」が音符で「モン」。「モン」は「ブン」にも変化する。「開」や「閑」は「門」と関係のある漢字だから、「門」が意符、残りの「开」や「关」が音符であり、「𠂔」や「𠂔」の略字が用いられたものである。

このように、形声文字における意符と音符の関係を理解すれば、面白いように漢字の成り立ちが分かるようになり、子どもたちは一層の興味、関心を持って意欲的に漢和辞典に親しみ、自らの力で「学年別漢字配当表」1006字の枠を突破し、「常用漢字表」1945字、さらには表外の漢字の大海まで漕ぎ出すことになるだろう。

漢和辞典は、「部首索引」以外に「音訓索引」、「総画索引」も可能で分かりやすい方法ではあるが、漢字の成り立ちを発見しながら学習できるという点で、是非とも「部首索引」を利用させたい。「四角號碼索引」は、小学校段階の子どもたちには到底無理であるばかりか、教育的効果も期待できないと考える。

おわりに

これまで小学校における漢字指導のあり方に絞って述べてきたが、実際の学校現場においては、教科書の教材を通して「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域の学習を進める中で漢字の学習も行うというのが常であり、漢字学習が中心にあるのではない。国語の授業では、教材の通読段階で漢字の読み（音）を、精読・未読段階では漢字の意味（義）を、教材を終えてから漢字の点画（形）を学習するのが一般的である。新指導要領では、これらを含め、記録、説明、報告、紹介、感想、討論など豊かな言語活動と、各学年の適当な時期に漢字の組み立てや成り立ち（知識）を重点的に取り立て指導する系統性とのスパイラルな関係こそが重要な改善点として示されているのである。

本稿では、その系統性について、漢字の体系と子どもたちの発達段階を考慮し、漢字の基礎基本を楽しく学ばせ、正確な土台を築いていく低学年、漢字の組み立てを知り、部首で整理する中で漢字を知的にも量的にも豊かに拡大していく中学年、漢字の成り立ちを学び、特に形声文字の意符・音符を活用する力を身につけることによって自ら漢字の世界を広げていく高学年へと成長することを願って論述してきた。大方のご批正をお願いする次第である。

<引用文献>

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」平成 20 年 1 月

文部科学省「小学校学習指導要領」平成 20 年 3 月

文部科学省「小学校学習指導要領解説 国語編」平成 20 年 6 月

加藤常賢・山田勝美著『角川 当用漢字 字源辞典』角川書店、昭和 49 年 5 月

<参考文献>

諸橋轍次著『大漢和辞典』大修館書店、昭和 46 年 5 月

中華書局編輯部影印組『康熙字典』中華書局出版、1962 年 12 月

小林一仁著『漢字教育の基礎研究』明治図書出版、1981 年 4 月

飛田多喜雄・小林一仁編『漢字、語句・語彙の指導』明治図書出版、1983 年 10 月

橋見千恵子著『生きてはたらく言語の指導』国土社、1994 年 12 月